

日本酒で乾杯推進会議レポート

第6回「100人委員会」開く

運動の拡大と震災被害からの復興へ、結束さらに裏千家家元・千宗室氏が「ゆとり」をテーマに講演



千宗室氏



第6回目の「100人委員会」(石毛直道代表)が、5月20日の午後、港区元赤坂の明治記念館で開催され、「日本酒で乾杯推進会議」の活動や今後の乾杯運動のあり方などをめぐって意見交換を行ったほか、委員のひとりで茶道裏千家家元の千宗室氏が「ゆとりを見つける」と題して講演(上の写真)。会議終了後には懇親の宴「日本酒文化を味わう会」も開かれ、運動の拡大と東日本大震災からの蔵元復興へ向け結束を誓い合いました。



明治記念館



「日本酒文化を味わう会」の様



震災被害からの復興を祈って「日本酒で乾杯！」

出席された委員の顔ぶれ

(50音順)

				
秋山 裕一氏 (日本醸造協会顧問)	飯田 博氏 (㈱岡永代表取締役会長)	石毛 直道氏 (国立民族学博物館名誉教授)	神崎 宣武氏 (民俗学者)	北本 勝ひこ氏 (東京大学大学院教授)
				
木村 修一氏 (東北大学名誉教授)		兒玉 徹氏 (日本醸造学会会長)	阪田 美枝氏 (『日本の酒造り唄』著者)	島田 律子氏 (日本酒スタイリスト)
				
千 宗室氏 (裏千家家元)	高橋 竹山氏 (津軽三味線演奏家)	滝澤 行雄氏 (秋田大学名誉教授)	辰馬 章夫氏 (日本酒造組合中央会会長)	手島 麻記子氏 (日本酒スタイリスト)
				
松野 昂士氏 (前北里大学教授)	三田村有純氏 (漆芸家、東京芸術大学教授)	山本 祥一朗氏 (評論家)		

中村富十郎氏が逝去、新たに 4 氏就任。メンバーは現在 91 名

「日本酒と日本文化のルネサンス」を旗印とする業界一丸のカルチャームーブメント「日本酒で乾杯運動」。運動の中核組織である「日本酒で乾杯推進会議運営委員会」(西村隆治委員長)を平成 16 年 6 月に設立して以降、丸 7 年にわたり、「日本酒で乾杯」の普及、定着を通じた日本文化の復興に向け、全国各地で様々な取り組みが繰り広げられてきました。

文化、芸術、経済など各界著名人による乾杯運動の支援組織として発足(平成 17 年)した 100 人委員会の開催も、今回で 6 回目。5 月 20 日現在、運動の主旨に賛同してメンバーに名を連ねる著名人は 91 名を数えます(今年 1 月に中村富十郎氏が逝去され、新たに新名惇彦氏 奈良先端科学技術大学院名誉教授、福井正興氏 日本青年会議所会頭、三田村有純氏 漆芸家、東京芸術大学教授、吉田敏臣氏 大阪大学名誉教授 が就任)。

各メンバーとも、それぞれの分野において「日本酒で乾杯」の実践や言論活動などを通じ、運動の支援に取り組んでいます。推進会議の専用ホームページ(<http://www.sakedekanpai.jp>)で連載している「100 人委員会コラム」への寄稿も好調で、今年に入ってからだけでも坂東三津五郎氏をはじめ 14 名のコラムがアップされ、日本酒や食文化をめぐる様々な話題を提供しています。

最近の 100 人委員会コラム(掲載順)

- ・坂東三津五郎氏 「日本酒でしか味わえぬもの」
- ・山本 祥一朗氏 「揺れに酔う心地、飲む酔い心地」
- ・畑 正高氏 「不思議なことに」
- ・北本 勝ひこ氏 「日本の食文化を支えている麹菌」
- ・塩川 正十郎氏 「元気が湧くお酒」
- ・市川 團十郎氏 「乾杯」
- ・ありむら 治子氏 「酒屋の孫に育って」
- ・谷本 互氏 「爛酒と思い出」
- ・本間 千枝子氏 「雉酒・未来に役立つ豊かな過去」
- ・浜 美枝氏 「食と酒と人と」
- ・小泉 武夫氏 「銘酒誕生」
- ・千 宗守氏 「茶の湯と日本酒」
- ・家森 幸男氏 「お酒に乾杯！」
- ・茂山 千作氏 「酒と狂言」

若者にお酒を飲む喜びを教えるのが我々の義務(石毛代表の挨拶)

今回の会合には、石毛直道代表らメンバー 16 名のほか、中央会から辰馬会長(100 人委員)、岡本副会長、推進会議の西村運営委員長らが参加。石毛代表の開会挨拶に続いて、西村運営委員長による活動報告、茶道裏千家家元・千宗室氏の講演「ゆとりを見つける」、意見交換、「日本酒文化を味わう会」での懇親、という順でプログラムが進められました。

冒頭挨拶に立った石毛代表は、「最近若者が酒を飲まなくなっている。昔は先輩がお酒の飲み



挨拶する石毛代表



方、楽しさを教えてくれたが、そういう機会は現代では失われてしまった。お酒を飲む喜びを教えるのは我々の年代の義務」と述べた上で、「お酒は人と人だけでなく、人と神様を結び付ける。日本の神様は酒好きで、日本の伝統文化の中で酒は重要な位置を占めている。日本の伝統を活性化させるという視点で運動を考えることが必要だと思う」と、改めて乾杯運動の意義を強調しました。

23年度の活動計画 - 推進会議会員数の目標を5万人に拡大

「日本酒で乾杯推進会議」の活動報告を行った西村委員長は、はじめに中村富十郎氏への弔意を表した上で、22年度の実績と23年度の活動計画について概要を説明。

このうち、23年度の計画としては、会議の会員数が当面の目標3万人達成目前となった（5月19日現在で2万8120名）ことから「目標数を5万人に拡大する計画」であることを報告。また、9月30日開催の「総会・フォーラム&懇親パーティ」（明治記念館）に関して、「今年は100人委員の中から女性の委員にお願いして開会宣言を行い、皆で唱和することで、改めて運動の意識統一をしたい」との考えを示し、現在、「私たちは、日本を愛します。日本文化を愛します。そして、日本酒を愛します」などの文言が宣言案として検討中であることを報告しました。

一方、福島県で開催される地方大会については、「震災被害を乗り越えて元気を出そうと開催に意欲を燃やす福島県の取り組みをできる限り応援していく」方針です。

「乾杯フォトコンテスト」開催

新たな活動として注目されるのが「乾杯デジタルフォトコンテスト」の実施。これは、日本酒で乾杯している写真（現代的な乾杯、伝統的な乾杯、儀式、宴会など）をメール、写真雑誌などで公募し、コメント（写真の説明やエピソード）も含めて優秀な作品（大賞、入賞、佳作）を表彰するもので、西村委員長は「話題の提供と共に震災後の日本酒業界を元気づける意味でもぜひ取り組みたい」として、100人委員会に協力を求めました。



西村運嘗委員長

日本酒で乾杯推進会議の主な活動計画（23年度）

1. 会員の拡大 当面5万人の達成を目指す。
2. 総会・フォーラム・懇親パーティの開催
・日 時 平成23年9月30日(金)16時～20時30分
・会 場 明治記念館
・テーマ 「酒と芸能 ～日本のかたち、日本のこころ～」
3. 地方大会(福島大会)の開催
・日 時 平成23年9月24日(土) 時間未定
・会 場 福島県会津若松市 鶴ヶ城・会津能楽堂
4. 支持基盤の拡大
・関係機関・諸団体に働きかけ運動基盤の拡大を図る。
5. 各地区の運動情報の収集 / 各県組合・組合員との連携
6. インターネット・メディアの展開
・メールマガジンの発行継続
・ホームページの充実（100人委員会コラムの継続など）

第1回「乾杯デジタルフォトコンテスト」の概要

- テ ー マ 日本酒で乾杯
応募規定 デジタルデータ(JPEG形式、600万画素以上)
応募資格 日本酒が好きで日本の文化に興味のある20歳以上の方
応募締切 平成23年7月15日(金) 当日必着
応募点数 制限なし。但し、一点ずつ所定の応募用紙(日本酒で乾杯 HP からダウンロード可)に記入
審査結果 乾杯デジタルフォトコンテスト実行委員会審査後、入賞者には8月中旬に直接通知。また、9月以降に推進会議のHP等で入選結果を発表するほか、推進会議関連催事の会場にて掲示
賞・賞品 大賞1名 賞金5万円・全国の銘酒4合瓶1年分 / 入賞5名 全国の銘酒3ヶ月分 / 佳作10名 全国の銘酒1ヵ月分 (大賞受賞者は9月開催の総会・フォーラムで表彰)
展 示 推進会議の開催するイベント会場で展示すると共に、終了後は、日本の酒情報館に展示

示唆に富むお酒の楽しみ。千宗室氏の講演「ゆとりを見つける」

千宗室氏の講演「ゆとりを見つける」は、生活のゆとりという視点から飲酒の楽しみを見つめなおしたもので、自らのお酒とのつきあい方や茶道と飲酒との関わりなどを交えた自在な語り口が、聴講した委員各氏に強い印象を与えました。

この中で千氏は、旅の楽しみを引き合いにお酒の楽しみの豊かさを分析。「旅行は目的地に行くだけが旅行ではない。旅館を決め、切符を手配し、電車に乗る、そのひとつひとつが旅の楽しみであって、旅行に出ようと思ったときから既に旅は始まり、高揚感が増してくる。家に帰って旅装を解いても旅は続いている。お酒も同様で、飲もうと思ったときから酒席は始まっている。今晚飲むお酒の味を想像するのも楽しいし、実際に一杯目を飲み、ゆったりとひと時を過ごした後、酒の思い出に浸りながら、ほろ酔いで家路に着く。この間もまだ酒席の楽しさは続いている」という言葉は、気持ち次第で、お酒には無限の楽しみがあることを感じさせました。

お酒を楽しむことは、自分で慌しくしてしまった人生を引き戻すこと

千氏はまた、「日本酒は間口が広くて奥行きが深い酒。ビールなどに比べて、どっしりと構えて、大人の飲み物の風格がある。食事の酒として日本酒ほど優れているものはないと思う」とした上で、「お酒を飲むのに構える必要はないが、酒にはマナーがある。例えば先輩と後輩のマナーなどを教えてくれるのが座敷だが、最近の若者はそういうことを教えてもらっていない。茶の湯でも『客に法なし』という言葉があるように、ルールはないがマナーは大切だ」と、若



者へのマナー教育の必要を強調。

最後に「赤信号を渡らなければならぬほど人生は慌しくはない。お酒を楽しむことは、自分で慌しくしてしまった人生を引き戻すこと、素晴らしいひと時に感謝することであり、(そういうゆとりあるお酒の楽しみ方により)夕刻の時間がより馥郁としてくる」と述べて、今後の乾杯運動を考える上でも多くの示唆に富んだ講演を締めくくりました。



千宗室氏のプロフィール

昭和 31 年、京都府生まれ。臨済宗大徳寺管長・僧堂師家 中村祖順老師のもとで参禅得度。祖順老師没後、妙心寺盛永宗興老師のもとで参禅。平成 14 年 12 月、第 16 代裏千家家元を継承。今日庵理事長、茶道裏千家淡交会理事長、裏千家学園茶道専門学校校長。

現在、京都文化交流コンベンションビューロー副理事長、京都府国際センター理事、京都文化芸術都市創生審議会副会長、立命館理事、京都造形芸術大学教授、同志社大学客員教授、学習院女子大学客員教授等の公職を持つ。

主な著書に、『昨日のように今日があり』(講談社)『自分を生きてみる』(中央公論新社)『京都あちこち独り言』(淡交社)など。

100人委員会の運営方法や運動の進め方などをめぐり意見交換

続いて行われた意見交換の時間では、推進会議運営委員の山邑、佐浦両委員を司会に、乾杯運動の進め方や総会・フォーラムのあり方などをめぐってやり取りが交わされました。

委員からは、「総会・フォーラムの開催を2日に分けて、フォーラムのほうはもっと若い人が参加できて、日本酒を知る機会になるようにしてはどうか」(手島麻記子氏)、「100人委員会の中に、若い人への影響力が大きい現役の大学教授に参加してもらって、日本酒のおいしさを教育できるような運動を進めていくことが重要」(兒玉徹氏)、「100人委員のメンバーが地方で講演するとき、現地の酒造組合や小売組合に段取りしてもらって日本酒の楽しさ、おもしろさを話す機会を設けてはどうか」(山本祥一郎氏)など、特に若者に向けて日本酒の楽しさを知らせる取り組みの必要を指摘する意見が相ついだほか、運動の進め方についても「100人委員の皆さんがパーティなどで乾杯の発声を頼まれたときに、必ず『日本酒でやりたい』と言っていたら、日本酒で乾杯が広がってくるのでは。継続は力なり」(兒玉徹氏)との意見も出されました。



山邑運営委員

佐浦運営委員

また、仙台在住の木村修一氏は震災後の街の惨状を報告した上で、災害時におけるお酒の役割を指摘。「強いストレスを強いられる被災者にとって、お酒はたいへん有効だと思う。災害時にお酒をどう利用すべきか、そのあたりの調査をやっていただきたい」と要望しました。

岡本副会長が蔵元の被害状況を報告

木村氏の発言を受けて、中央会の岡本副会長が「災害時のお酒については我々もしっかりフォローアップしていきたい」と述べた上で、震災による蔵元の被害状況について報告。

「現時点で把握している限りでは、東日本で10蔵が全壊、半壊など何らかの影響を受けた蔵は合計270社を超える。福島原発事故による避難対象地域の中にあつた4蔵は全く活動できない状況だ。また、放射能汚染の問題も尾を引いていて、海外輸出に影響を与えている。この結果、3月の出荷は全国で約1割減、東北だけを取ると2割以上のマイナスとなったが、最近は復興に向けて東北の地酒を飲もうという気運が出てきているので、4月以降はやや回復してきているように思う。我々としても、こうした日本酒の再活性化の動きが一時で終わることなく長く続いていくようにしていきたい」と述べて、100人委員会の支援を呼びかけました。



岡本副会長



辰馬会長

「目覚めた日本人のDNA。蔵元も必ず再起する」(辰馬会長)

会議の最後に挨拶に立った辰馬会長は、「日本酒で乾杯運動は中央会の年間事業の最大の柱に育ってきた。100人委員会の日本文化への深い思い入れと、ご指導の



「日本酒文化を味わう会」で懇親のひとつき

賜物と感謝を申し上げたい。今日いただいたご意見は、これからの事業計画、需要開発計画の中にかかして生く。また、千宗室氏にも示峻に富んだお話をいただいた。お酒もお茶もゆとりを持って楽しむものという、造り手にとって示峻に富む話を聞くことができ幸이었다」と会合全体を総括した上で、東日本大震災の問題に言及。

「震災後2ヶ月余を過ぎ、まだ避難所にいる皆様は先の見通しが見えない中で、日々筆舌に尽くしがたいストレスに耐え抜いておられる。少しでも酒で心を和らげていただけたらと思うが、そんな極限状態の中でも一筋の光が見える。それは被災者も救援に携わる人たちも皆で助け合い、励まし合い、分かち合い、譲り合い、前を向いて真剣に何ができるかを考えている、その心の輝きだ。乾杯運動は日本人に日本が足りなくなったという懸念から始まったが、こういふときこそ日本人のDNA、美しい精神風土が目覚める。それが日本人の底力だと思う。おいしい日本酒を待っているお客さまがおられる限り、我々蔵元も必ず再び立ち上がる。ご安心をいただきたい」と、力強い言葉で今後への決意を示しました。

復興を祈念して「日本酒で乾杯！」。義援金の募集も(日本酒文化を味わう会)

100人委員会終了後には、恒例の「日本酒文化を味わう会」が開かれ、石毛代表が「今回の震災で被害を受けた蔵元、小売店、飲み屋さんたちが1日も早く復興して、東北の方々が地酒を楽しめるようになることを祈念する」と挨拶したのに合わせて、全員そろって「日本酒で乾杯！」(表紙写真)。会場の一画には、東日本大震災による蔵元の被災状況を記録したアルバムと共に義援金の募金箱も設けられ(写真左)、一同は全国各地の日本酒18銘柄やお燗酒、さらには炭酸やレモンで割った夏向けの日本酒などを味わいながら、蔵元の復興へ向けた更なる支援強化の意志を確認し合っていました。

